

## 早期咽頭梅毒の一例

行木 英生      行木 一郎太      鈴木 法臣      川崎 泰士

静岡赤十字病院 耳鼻咽喉科

【目的】 45歳男性に見られた第2期咽頭梅毒の診断と治療結果の報告。

【方法】 数ヶ月前からの咽頭痛を主訴とする紹介患者で、口蓋垂を中心に中咽頭両側にはほぼ対称的に不整形の粘膜疹（乳白斑）がみられた。反復問診で5ヶ月前の韓国旅行の際コンドーム使用の性交渉以外にオーラルセックスが行われたことが述べられた。初診医は当初、急性咽頭炎、伝染性単核症、難治性潰瘍性咽頭炎や悪性疾患（扁平上皮癌、悪性リンパ腫、白血病等）を考えて検索を進めたが、butterfly appearanceと称される咽頭粘膜の乳白色の不整形粘膜病変と問診結果から、性感染症（梅毒、クラミジア、HIV）、特異性炎症（結核）等が鑑別疾患として検討され、検体検査、細菌検査、組織検査、画像検査等を行った。

【成績】 検体検査では WBC : 8140, CRP : 1.81, 梅毒血清反応 : 強陽性 (TPLA 定量 7660.00TU, RPR 定量 3.20 R.U.), HIV-1, 2 : 陰性, 腫瘍マーカー SCC : 0.8, 抗酸菌検査 : 陰性, 胸部 X-P : 異常陰影なし, 頸部 CT : 両側口蓋扁桃と頸部リンパ節の腫大のみで腫瘍病変なし。最終的には口蓋扁桃の病理組織検査 (HE 染色 : 肉芽腫, 免疫染色 : treponema pallidum 菌体陽性) から梅毒スピロヘータが同定され、梅毒性咽頭炎と結論。治療はペニシリン系薬剤のサワシリン 1,000mg/日投与により、4週間後には咽頭粘膜疹は消失した。妻の TP 値も正常範囲を超えていたので、夫婦ともに性感染症を専門とする皮膚科に紹介。パセトシン 1,000mg/日が8か月間投与され、梅毒血清反応は RPR が  $128 \times \rightarrow 4 \times$ , TPHA が  $10,240 \times \rightarrow 2,560 \times$  で下げ止まり。血清学的には病態は固定化。

【結論】 オーラルセックスに起因したと思われる咽頭梅毒の一例を経験し、診断および治療結果を報告した。性感染症はいつの時代でも見られるもので、コロンプスのアメリカ大陸上陸以降、梅毒は抗菌薬により減少したとはいえ決してなくなるものではなく、耳鼻咽喉科領域でも見逃されてはならない。